

「基礎的知識」が豊かな人間をつくる

——教育現場から考えた「知育」と徳育——

「知育なしの徳育」などは考えられないことである。徳育の不足は否めない事実であるが、その状態を生んできたのは戦後の日本教育現場にはびこった「児童中心主義」の問題があったからだ。基礎的知識が人間の持つあらゆるものを豊かにする。子供たちにその知識を与え、自分たちで考え表現する力を養っていくことこそ「徳育」につながる。

「詰め込み教育」という名の誤解

「学校を開け 刑務所を閉ざせ」。ヨーロッパで、学校設立運動が展開された当時のキャッチフレーズである。かつてヨーロッパでは、教育の主体は教会であった。そのには長所とともにさまざまな弊害もあった。教会からの独立が求められ「学校世俗化運動」の一環として多くの学校が設立された。「学校を開け 刑務所を閉ざせ」、この言葉に、人々がどれほど知育に大きな期待を寄せていたかと窺うとができる。人々は、「知育」を進めれば徳育は自然に深まり、刑務所など必要がなくなると考えたのである。

「教育」という言葉を「教」と「育」のふたつに分解して、『教』はあったが『育』が不足している」などと大まじめに主張する人がいる。ここでは、教えることにある種の怯えを感じ、育てることの重要性が異常なほどに強調されているのである。子供は本来ひとりで育つべきものであり、大人の側から「不当に干渉」することは避けるべきだとする考えなのであろう。要するに、大人の側の自信の喪失が極端に顕れている。「児童中心主義」の理念に基づくものであろうが、同時にこの場合、「教」は知育を、「育」は徳育を示すと誤解したのではないかと考えられる。ここにも、「知育」に対するアレルギー的な警戒心が感じられるのである。「詰め込み教育」という言葉がある。戦前ではあまり聞かなかった言葉である。「私の学校では詰め込み教育をやっている」などと言ったら、四方八方から石つぶてが飛んでくるに違いない。もちろんそんな馬鹿を言ったりはしないが、「詰め込み教育否定」は、戦後かくのごとく、絶対的権威を持つようになったのである。

私は昭和26年、1951年、中学校の英語科の代用教員になった。その後大学4年間の空白を除いて、正味55年間、教壇に立ち続けてきたことになる。その間私には、ずっと抱き続けてきた疑問がある。「詰め込み教育と言うが、どうやって人間の頭に知識を詰め込むのだろう」「弁当箱に飯を詰め込むことはできる。しかし頭に知識を詰め込むことなどできるものだろうか」

「丸暗記」が表現力、思考力をつける

全世界を植民地にした白人列強は、アジア、アフリカの人間など猿同然くらいに考えていた。無人の境に行くかごとく、彼等の植民地支配はやすやすと展開された。ところが極東の一小国だけは、信じられないほどのプライドと軍事力によって、彼等の背骨をへし折るほど

の抵抗を示した。「太平洋戦争」に勝利した後、アメリカ占領軍が、この極東の危険国家を、軍事的のみでなく、精神的にも武装解除しようとしたとしても不思議ではない。彼等は、我が国の伝統文化のすべてを否定した。世界有数の水準を維持していた我が国の教育に対しても、彼等は侮辱の姿勢を持って臨んだ。戦前戦中の教育を、すべて「詰め込み教育」であると全面否定したのも、そのような一連の動きにほかならない。

しかし知育は、それほどに徳育を害するものなのであろうか。また知識は、本当に子供達の思考力や創造力を奪い去るものなのであろうか。

私は旧制中学で学んだのであるが、当時は先生は、例えば幾何で、証明問題を一つでも多く「覚えろ」と指導した。だが、幾何の証明の仕方を数多く覚えると、補助線を引くにしても、鋭い閃きが生まれるようになる。漢文の先生は、教科書一冊を丸暗記するように要求した。書き言葉は話し言葉の100倍を超える豊かさを持っている。音読し「丸暗記」する中で、書き言葉が話し言葉のように肉体化してくる。人間は話すとき言葉を使うだけでなく、考えるときにも言葉で考えるから、豊かな言葉は豊かな思考を生む。結局丸暗記が、豊かな表現力、豊かな思考力となって開花するのである。

基礎的知識が、豊かな思考力、豊かな創造力を生み出すことは、学科ばかりでなく音楽や美術のような芸術科目についても同様である。豊かな知識、基礎的な技術から、豊かな創造力、豊かな表現力が生まれ、それは人間性の豊かさにも結びついてくる。結局、知育なくして徳育など考えられないと私は思うのである。

子供たちの成長過程と教育のあり方

徳育の不足が嘆かれる。たしかに昨今の少年犯罪はひどい。それは少年から大人にまで及び、昨今では、親殺しや、親による子殺しさえ珍しくはなくなった。この徳育欠落の本当の原因は何なのであろうか。

一つには、児童中心主義的のものの考え方をあげることが出来る。デューイは、「子供は教育の主体であって客体ではない」と主張した。確かに教育は、生涯を通じて学び続ける人間の育成を最終目標とするのだから、人間が自己教育の主体として積極的に学ばなければならないという意味で、デューイの主張は正しい。だがここで忘れてはならないのは、発達段階という問題である。「子供が教育の主体」であるとして、乳飲み子は、いかにして教育の主体たり得るのか。

小学生も、3年生になるくらいまでは、「先生の良く思われれば、仲間の何と思われようと構わない」という発達段階にある。だから、隣の子供がいたずらをしたりすれば、直ちに言いつけにくる。言いつけられた子も「お前ちくったな」などど凄んだりはしない。全員が、先生と1本の線で結びつけられているのである。だからこの段階では、「殺すな」「盗むな」「嘘をつくな」「先生や親には無条件で従え」というような教育を徹底しなければならない。軽い体罰が必要であり効果的であるのも、この時期である。

4年生になると変わってくる。先生も大事だが、友達も大事という発達段階に達する。6年生になれば、むしろ友達の占める比重のほうが大きい。高校生ともなれば、友達との人間

関係が決定的な意味を持つようになる。

子供の自我意識が育ってくるのに応じて、教師や親は少しづつ後ろに引き下がっていく。そして最後には、「老いては子に従う」という境地にまで達するのである。その退いていく速度は、早すぎてもならないが、遅すぎてもならない。

それなのに、戦後特に顕著になった児童中心主義的傾向は、まだ自力では何をする 것도出来ないような子供に、「ひとりでに育つ」ことを期待し、教師は、その「育ち」を援助するにとどまるのが良いというような傾向を生み出してしまった。私はこれを「子供の内面からひとりでに芽生えるものに過剰な期待を寄せ、教え込んで行くことにアレルギー的警戒心を抱く傾向」と捉えている。戦後イデオロギーの病理現象であろう。

百害あって一利なしの「総合教育」

「徳育の荒廃」を生み出した今ひとつの原因は、耐える力を育成することに失敗したことである。「電車の中で老人に席を譲りましょう」などと、最近の学校は必死に呼びかける。だが席を譲る若者はいない。平気で長い足を投げ出し、却って前に立つ老人を妨げたりする。

他人の人種を尊重することの大切さが、しきりに強調される。だが他人の人権を尊重するということは、己の人権を犠牲にしなければならないということのほかならない。そのあたりが今日の学校では、全くというほど指導されていない。

子供達の生活環境自体が、我慢したり抑制したりする力が育ちにくいものになってきている。通学範囲も近いし、靴や雨具も完備している。遠距離に行くには自動車があり、重い荷物と背負って坂道を上がることなど、ついで経験したことがない。食いは冷蔵庫にふんだんにあり、食いたいもの、飲みたいものを、好きなだけ飲んだり食ったりすることができる。一体どこで耐える力や自己抑制力が育成されるというのか。

そこへ持ってきて「ゆとり教育」である。「知識の詰め込みよりは、自ら学ぶ姿勢の育成を」などと、文部科学省の小官僚どもは並べ立てる。現場校長で、これがまともだと考えている者など一人もいないのだが、そこはそれ、我が国初等教育界の特質で、「文部省と大学教授に逆らう」ことは絶対に避けるという体質が、明治以来すっかり定着している。

生活環境が安易化、利便化し、教師も厳しさを失っている中で、子供の自己抑制力、耐える力、強靱な意志を育てる有効な手段は勉強だと私は考えている。これほど恵まれた環境で、のんびり暮らしている子供たちが、勉強に関してまで「溢れるほどのゆとり」を与えられたのでは、彼等は一体どこで人間としての強靱さを獲得することができるのか。「総合学習」などは、百害あって一利なしだと私は考えている。子供に「しっかり勉強しろ、日がな一日自由な時間を与えられながら、勉強もしない奴は、小学生でも中学生でもない」と言い聞かせるほどの厳しさが、今求められているのである。

「詰め込み」なる蔑称を用いて、思考力や創造力の基礎となる知育を軽視する傾向は、学校教育から生命力を奪った。ところが皮肉なものである。学校がそのような「極楽とんぼ」を決め込んでいる間に、子供達は学習塾で豊かな知識を身につけている。学習塾は、結局本当の学力とは知識の総和に過ぎないということを熟知しているから、迷わず、ためらわず

「知育」に専念するのである。

私の学校の自習室には、次のようなスローガンが掲示されている。「学問は人間を駄目にしない。学問こそ人を作る。」

(平成 18 年 8 月 DAILY TIMES)